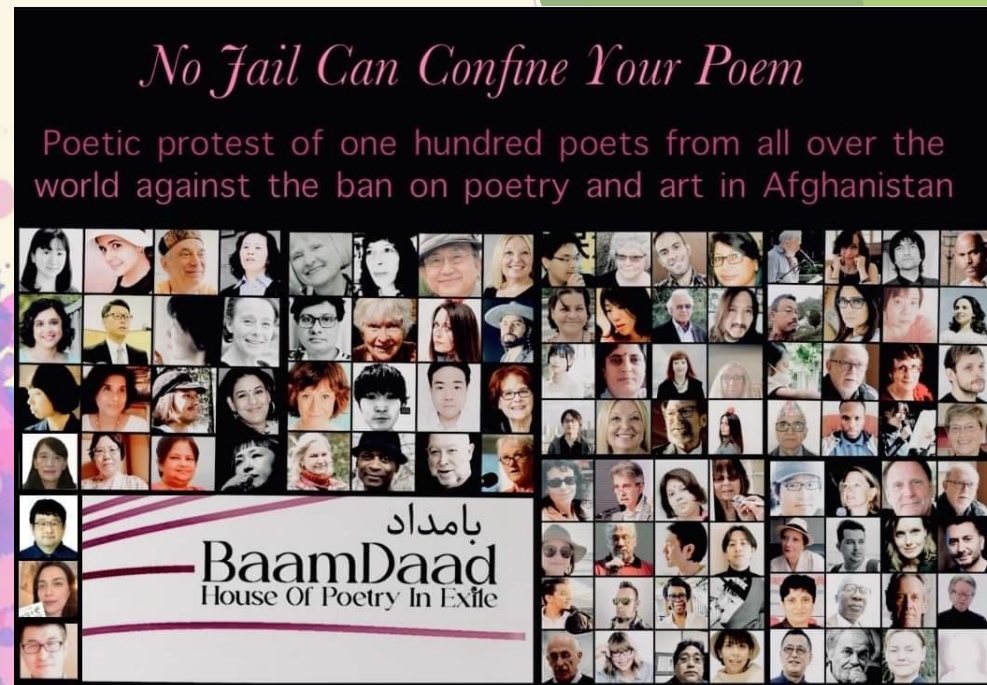


① アフガニスタン問題の本質と最新情勢

② 国内で可能な支援・連帯活動



2024年11月2日

- RAWAと連帯する会
- アフガニスタン最新情勢を語る

野口壽一

自己紹介： 自称・国際連帯活動家

- ・ 1948年 鹿児島生まれ （団塊世代ど真ん中）
- ・ 1967年 東京工業大学入学
- ・ 1972年 卒業

<反戦活動と学生運動>

- ・ **ベトナム反戦運動/朝鮮半島統一と民主化**
（在日ベトナム人留学生との連帯・支援、朝鮮総連および韓国民主回復・統一促進国民会議との連携）
- ・ **東工大闘争**
（寮闘争に端を発する大学闘争を指導）
- ・ **卒業して、学生時代に始めた「革命的ジューナリズムの創造」を掲げた思想運動に没頭**
- ・ 学生運動部会を組織し、**川口君虐殺に端を発する早稲田闘争を第2文学部自治会とともに指導**

社会主義と学生

1973.10 創刊号

特集・早大闘争を突破口に学生戦線の統一を！
学生運動の現状とわれわれの立場
イギリスにおける学生運動



〈活動家集団 思想運動〉学生運動部会



- ・ 学生運動でのめざめ
- ・ ベトナム戦争反対運動
- ・ 朝鮮半島の統一と民主化
- ・ 金芝河ら韓国青年の闘いと連帯
- ・ 金大中救出運動

・ 1980年～ アフガン取材

新生アフガニスタンへの旅
—シルクロードの国の革命—
野口寿一

群出版



<https://www.caravan.net/int/shinaf/>

ミーナが活動を始めたころのアフガニスタン

- ・ 1919年、アフガニスタン独立、アマヌッラー・ハーンの開明政治
- ・ 1957年、ミーナ、誕生
- ・ 1959年、ダウド首相の下、大学、職場など女性進出
- **60年代、70年代は アフガニスタンも激動期**
- ・ 1964～1965年、新憲法、政党結成 さまざまな潮流、男女とも国政選挙参加
- ・ 1973年、ダウドクーデタ、王制廃止
- ・ 1976年、ミーナ大学入学、結婚
- ・ 1977年、ミーナ、RAWA結成
- ・ 1978年 4月革命
- ・ 1979年2月 イラン革命
- ・ 79年12月 ソ連侵攻
- ・ 1987年、ミーナ殺害

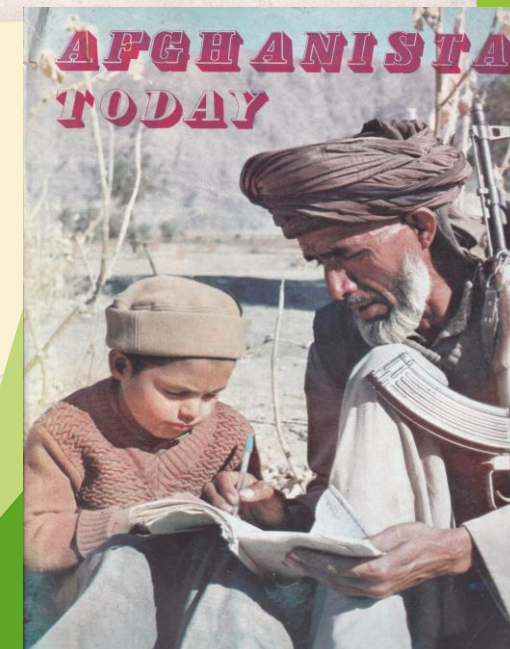
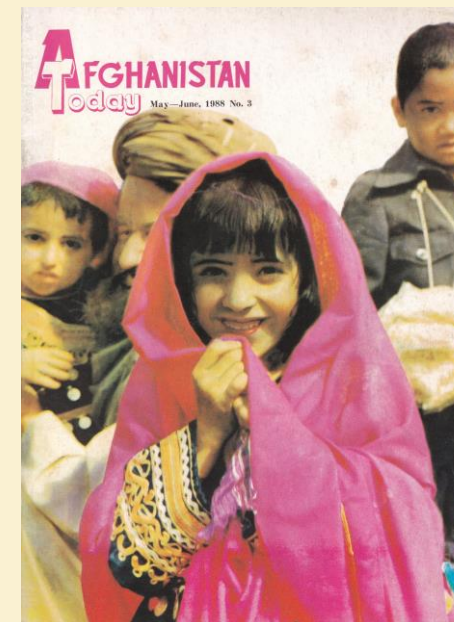
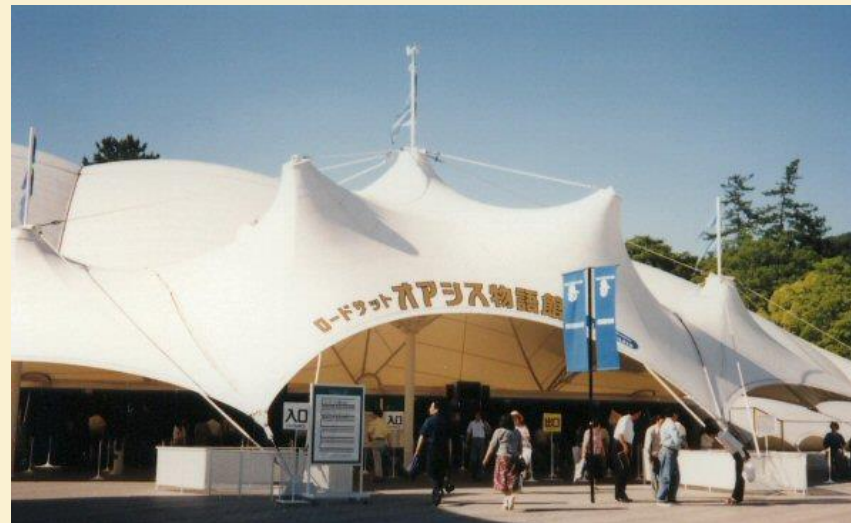
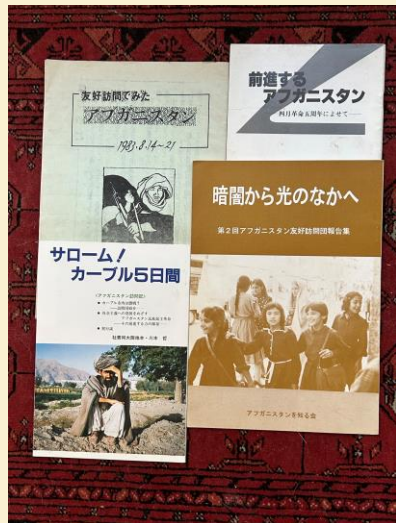
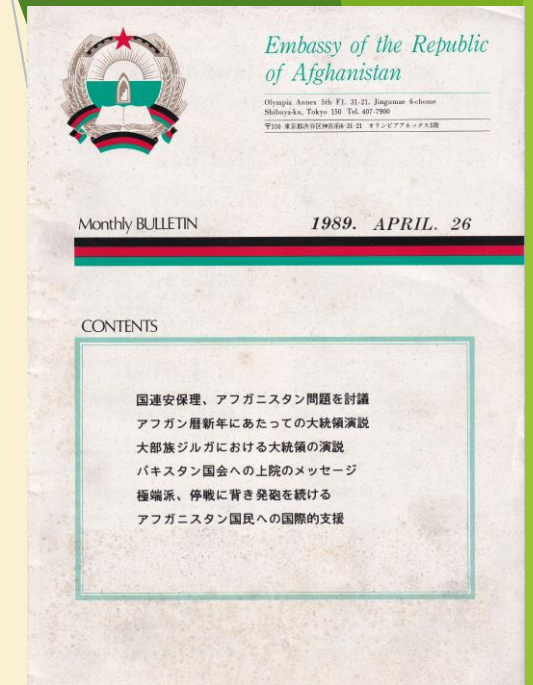
ミーナの思想の革命性

マルクス主義を標榜する左翼、ムジャヒディーン、部族長、ムッラーらの男社会の根底に存在する女性差別意識への徹底的な批判、対決、闘争

● アフガニスタン問題にはまる

・ 1980年 アフガン取材～1992年 PDPA政権崩壊まで

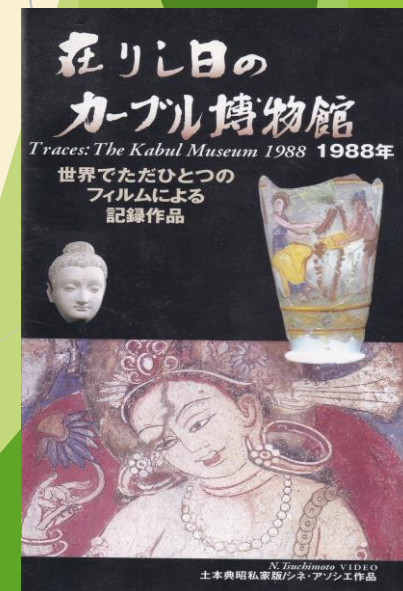
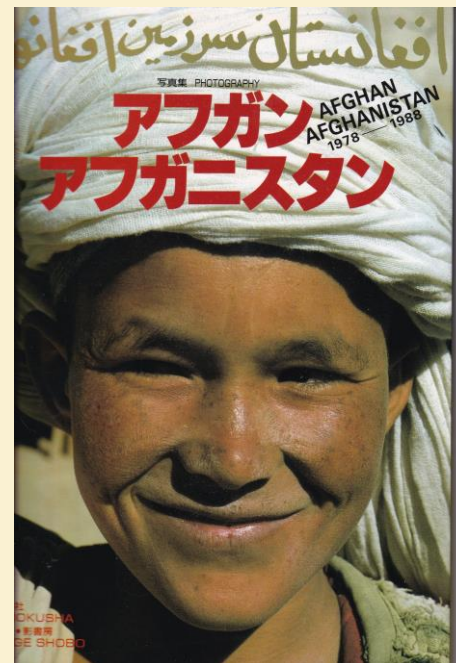
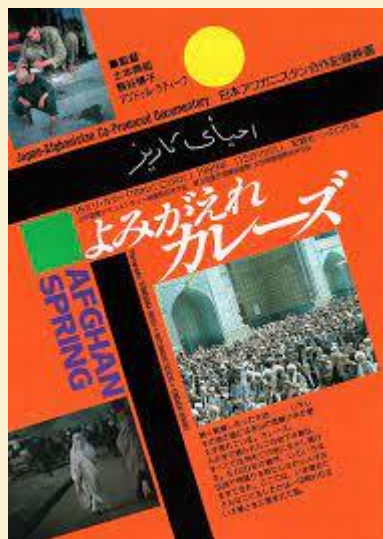
- ・ 全期間を通じ、ドキュメントの出版、友好運動
- ・ 1981年から友好訪問団の派遣、100人以上
- ・ 1987年、株式会社 キャラバンを創立
アフガニスタンとの経済活動追及
- ・ 1988年、ならシルクロード博覧会への参加
- ・ 1989年、アフガニスタンとの合作記録映画
『よみがえれカレース』制作



日本アフガニスタン合作記録映画

『よみがえれ カレーズ』

- ・ 1983年～1989年 土本典昭監督とともに制作／撮影
野口は原案者及び日本アフガニスタン友好協会事務局次長として制作に参加



アフガニスタン革命の挫折と敗北 研究活動とベンチャー支援に専念

- ・ 4月革命挫折、アフガニスタン内戦ドロ沼化、ターリバーン登場
- ・ 会社経営とベンチャーの実践

元駐日アフガニスタン大使、元アフガニスタン人民共和国副大統領アブドル・ハミド・ムータット氏とアフガニスタン革命がなぜ失敗したかを研究、カナダの出版社から出版（アマゾンで購入可）

- ・ 2001年、9.11事件発生、米軍アフガン侵攻、



2003年2月にはカルザイ大統領以下新政権のトップが東京に勢ぞろい。協力を要請されたが丁寧に断る

2020年2月29日、ドーハ合意成立、米欧軍の撤退決まる

アフガン人による新しい国づくりが始まると判断

2021年4月、つちかったIT技術を生かして、新しい局面に参加しようとブログを立ち上げ



＜『ウエッブ・アフガン』開設の目的＞

なぜ今またアフガニスタンなのか？

○ <https://afghan.caravan.net/#~001>

＜ソ連の進駐と米英NATOのアフガン進駐に対する『ウエッブ・アフガン』の立場＞

○ https://afghan.caravan.net/editors_voce/#001

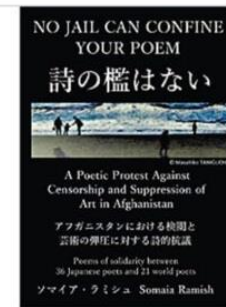


WebAfghan 2023年のふたつの大きな成果

『詩の檻はない』の活動



今年、アフガニスタンではタリバーンがバームダッド（夜明け）囚われと亡命詩人ソマイア・ラミシュさんは世界中の詩人から支持を受け、一冊の本になりました。『詩の檻はない』 amazon.co.jp/dp/481503933X
※収益はバームダッドに寄付されます



WebAfghan 2023年のふたつの大きな成果

千葉明德学園でのアフガン日本語学校開設



さていよいよ本題

アフガニスタン問題の本質と最新情勢

そもそもアフガニスタンとはどんな国？

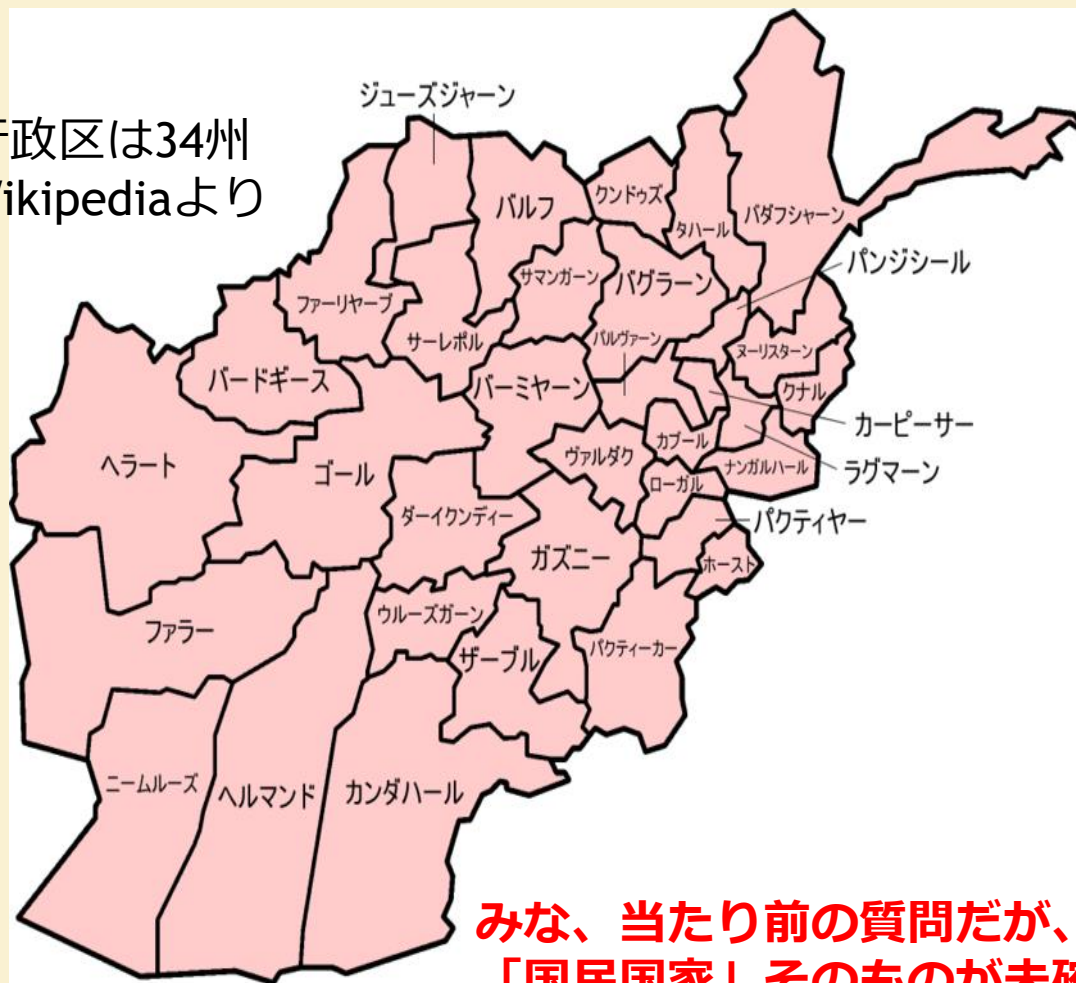
アフガニスタンと周辺諸国



アフガニスタンってどんな国？

普通、こんな疑問を持つのでは？

行政区は34州
Wikipediaより



- ・面積は？ 65万Km2(日本の1.7倍)
- ・首都は？ カブール
- ・人口は？ 3000万人～4000万人
- ・政体は？ ターリバーンによればイスラム首長国
- ・言葉は？ ダリ語、パシュトゥ語他多数
- ・民族は？ パシュトゥン、タジク、ハザラ、ウズベク、トルクメン、バルーチ、ヌーリスタニ他
- ・宗教は？ イスラム教スンニ派、シーア派
- ・軍隊は？ ターリバーン 正確な数字は不明 十数万
- ・経済規模は？ GDP 192.9億ドル（2019年世界銀行）
- ・主な輸出品は？ ドライフルーツ、薬草、果物

みな、当たり前ですが、
「国民国家」そのものが未確立。まともな国勢調査もされたことがない。

国境は大国の思惑と圧力の妥協によりひかれた境界線にすぎない

民族と部族、異なる宗教が混住。海に囲まれた日本人には理解困難



・デュアランドライン

(1893年、アブドゥッラフマン・ハーン)

・パキスタン側は

- ・カイバル・パクトウンクワ州
- ・バルーチスターン州
- ・パンジャブ州 ・シンド州

・パキスタンはインドとの関係で縦深戦略

・アフガニスタンを属国扱い

・パシュトゥーン問題

パキスタン国民の十数%、軍の2割

・難民

戦乱が半世紀もつづいている

- ・ 1978年：4月革命（軍とアフガニスタン人民民主党によるクーデタ）
- ・ 1979年～1992年：PDPAとソ連軍による支配
- ・ 1992年～1996年：ムジャヒディーンによる支配と内戦
- ・ 1996年～2001年：第1次ターリバーン支配
- ・ 2001年9月、アメリカ同時多発テロ、米欧軍の侵攻
- ・ 2001年～2020年2月：ターリバーン・イスラム勢力、対米欧ジハード

＜ドーハ合意＞2020年2月29日

- ・ 2020年～2021年8月末：米軍撤退
- ・ 2021年8月15日、ターリバーン復権、第2次ターリバーン支配

アフガニスタン情勢の変遷

ターリバーンの復権と内政

<afghan.caravan.net> トピックス欄

- 2020年2月29日～
- 2021年～
- 2022年～
- 2023年6月20日

<afghan.caravan.net> トピックス欄

- 2023年6月20日～
- 2024年～

- ターリバーンの独特の解釈によるイスラームの法体系「シャリーア法」とパシュトゥーン族の掟「パシュトゥーン・ワリ」の混合による強権支配

アフガニスタン最新情勢

ブログマガジンの活用を！

<https://webafghan.jp/>

<https://afghan.caravan.net/>

- たっぷり時間のある方
 - ★ トピックス欄を時系列に見る
- ある程度詳しく見たい方
 - ★ 読みどころの活用
 - ・ ハステ・スブ、アムTVの見出し
 - ・ インデックス→記事に飛べる
- ざっと一瞥したい
 - ★ 「アフガンの声」 ページの見出しをみる
 - ★ 気になる記事にジャンプ→WAJの概要を読む

アフガニスタン最新情勢ー 1

●ごく直近の動き

- ★女性をめぐる情勢（中等教育以降の禁止、就業禁止、家庭への閉じ込め、等々）
- ★宗教学校化（ジハードマドラサ、女子マドラサの創設、カリキュラムの非世俗化）
- ★報道・表現の自由への抑圧（ジャーナリスト弾圧、報道の検閲、テレビ事前録画検閲）
- ★シャリーア法の制定（8月、新シャリーア発表、ISのものに極似、一枚板を誇りつつも内部に軋み）
- ★地震・洪水対策（ヘラート大地震、北部大洪水、外部支援に依存）
- ★経済不振（国家予算の6割は外国からの援助、それがゼロ。給与不払い年金停止、等々）
- ★領空タナボタ収入（1機700ドル、1日195機、年間50万ドル／年間政府収入30億ドル）

●それらがありつつも国際的な承認への動き

- ★各種国際会議への出席（上海機構など中ロ主催、6月国連会議出席、カタールなど周辺国会議）
- ★周辺国でテロ指定解除への動き（中国、ロシア、パキスタン、カザフスタン、キリギス等）
- ★6月ドーハ会議（第3回会議はターリバーンと行われ、アフガン女性の参加は認めなかった）
- ★アメリカは相変わらず裏からの支援（毎週4000万ドル、3年間で207億ドル送金。SIGAR発表）

●国内における反ターリバーン勢力

- ★国民抵抗戦ほか（他にも武装抵抗している組織もあるが散発的。外国の支援もない）
- ★救済抵抗戦線(ドスタムら)亡命政府結成呼びかけ（賞味期限切れ。そもそも腐敗の張本人たち）

●2024年8月22日 <amuTV（アフガニスタンの独立系テレビ局）>

ターリバーンの新しい「悪徳と美德」法の主要条項

（WAJ: IS(イスラム国)が定めているシャリーア法(イスラム法の解釈)ときわめて類似していると批判されている規定の数々である。もはやコーランの教えに反する教義と言えるのではないか。）



●2024年10月13日 <amuTV（アフガニスタンの独立系テレビ局）>

**PTM（パシュトゥーン・タハフズ運動）のリーダーはジルガ
に対し、アフガニスタンの女子のために学校の再開
をターリバーンに要求するよう促す**



アフガニスタン最新情勢ー 2

●パキスタンのうごき

- ★PTM（パシュトゥーン・タハフズ運動：2014年結成のパシュトゥーン中心主義団体）
- ★難民強制帰国（非認可180万人を帰国させるとして強行。国境で武力衝突）
- ★デュランドライン、壁・フェンスの建設（約2640kmに壁ないし鉄条網などで遮蔽）

●イランのうごき

- ★難民強制帰国（約200万人の未登録難民を帰国させるとし、75万人を帰国させた）
- ★水資源争奪（ヘルマンド川の水利権をめぐる対立。武力衝突も起きている）
- ★実質承認の動き（一方では交渉も。大統領就任式他）

●ロシア・中央アジア

- ★テロ指定解除（ロシア、カザフスタン、キリギス、ほか）
- ★実質交渉（ロシアにおけるIS- k などのテロ対策としてターリバーンを利用）

●中国

- ★大使交換（実質的承認）
- ★アイナク鉱山など（中国の進出に対して中国系ホテルなどへの爆破攻撃）

2021年8月以降、ターリバーンが実質支配 国名を「イスラーム首長国」と名乗っているが世界で承認している国はない

- ターリバーンは暫定政府をつくり、強権支配している。
- カーブル占拠後3年たって、中・ロ・イランなど一部の国は実質交流
- アメリカは表立ってはターリバーンを批判しているが裏ではつながっている。
- 日本は国家承認はしていないがカーブルに大使館を置き、正式な関係樹立

ターリバーンの内政

- イスラームの法体系「シャリーア法」とパシュトゥーン族の掟「パシュトゥーン・ワリ」による強権的な支配

- 支配の特徴

- ―イスラーム復古主義、戒律の厳格な適用

- 服装規定、宗教儀式、公共の場での娯楽の禁止、酒や賭け事、麻薬の禁止

- ―厳格な女性管理

- 就労の禁止、教育の制限（12歳まで）、自由な街種の禁止、行動の制限

- ―文化的な抑圧

- 芸術、音楽、映画などの禁止、厳格な検閲

- ―極端な宗教観の強要（イスラームのなかでも少数異端）

アフガニスタン問題とは：主要要素の絡み合い

- ・ パシュトゥーン問題

パシュトゥーン・ワリ 民族・部族の伝統的しきたり

- ・ 民族対立 パシュトゥーン／タジク／ハザラ／ウズベク

- ・ 宗派対立 スンニ派とシーア派

- ・ イスラム原理主義・過激主義

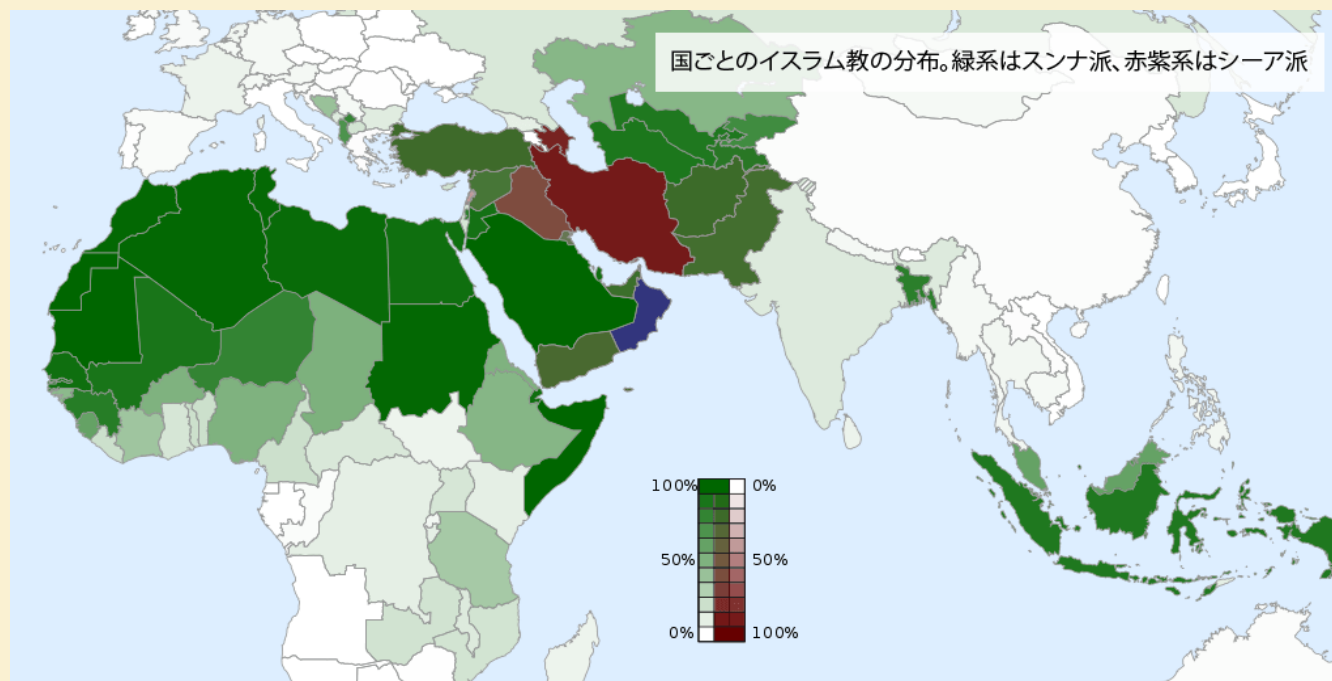
アル＝カーイダ、イスラム国、イスラム国ホラーサーン、等々

- ・ 外国勢力の引き入れと干渉

次ページ以下、イスラームに関する基本的な知識

◆ 南アジアへのイスラームの伝播 歴史と地域的拡大

- ・ゾロアスター教→ユダヤ教→キリスト教→イスラーム
(すべて一神教、**すべて男がつくった**)



イスラーム教の成立：西暦622年（ヒジュラ暦元年）
ペルシャ：7世紀前半（西暦651年ササン朝崩壊後）
アフガニスタン：ペルシャと同時期、ガズナ朝成立後急速に普及（10世紀以後）
インド：西暦712年ころウマイヤ朝侵入、16世紀後半ムガル帝国の建国によりピーク、1857年崩壊
インドネシア：ヒンドゥー王国マジャパイト13世紀イスラーム教の伝播

世界人口：2020年 78億人

キリスト教：24.4億
イスラーム：19.5億
ヒンズー教：11.6億
民俗宗教：4.4億
仏教：4.9億
無宗教他：5.2億
無神論：7.9億

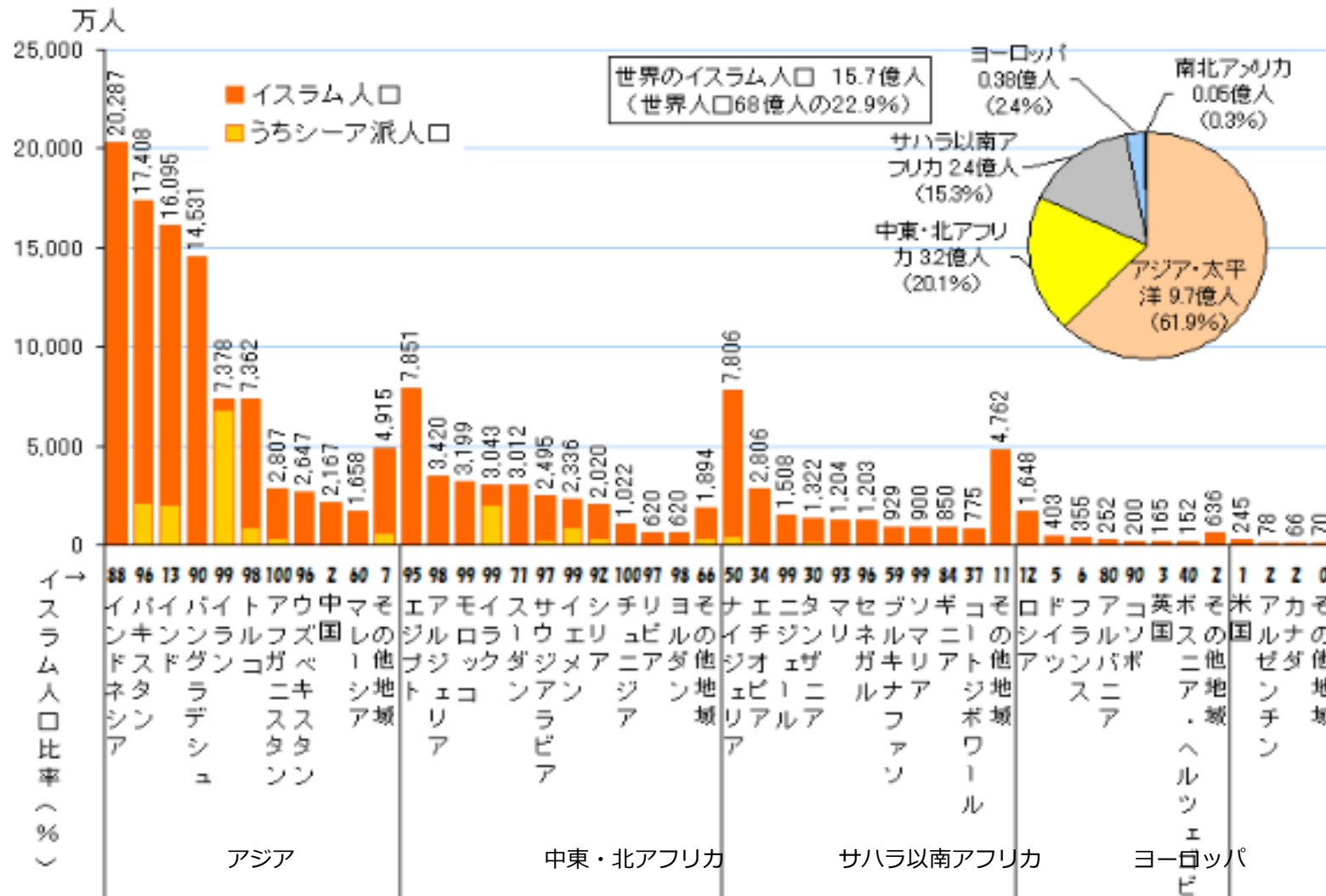
(<https://aikido.mixh.jp/world-religious-statics-2/>)

注：オマーンは75%がイスラーム教イバート派、25%がスンニ派（イバート派は独特の共同体を持つ）

・インドムガル帝国：ティムールの5代孫にあたるバーブルがインドに開いたスンニ教の王朝。ムガルとはモンゴルのこと。アフガンから出撃。

見落としがちな真実＝モスLEMの数はアジアが最大

世界のイスラム人口(2009年推計)



インドネシア人口 2.75億人
 パキスタン人口 2.35億人
 エジプト人口 1.1億人
 イラン人口 8800万人
 サウジアラビア人口 3641万人
 イラク人口 4450万人

◆ イスラームの特徴

- ・ **六信**（アッラー、天使、啓示(クルアーン)、預言者、来世、宿命）
五行（信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼） 加えて、**政教一致／ジハード**
- ・ クルアーンとハディース（ムハンマドの言行録）、スンナ、シャリーア
- ・ カリフ政治とイスラーム法（シャリーア）
- ・ シャリーアの中味をきめる法学者（ウラマー）、裁く裁判官（カーディ(ウラマー)）
曖昧な規定（禁止と義務の間が大きい）を決めるのがウラマーで各国、各地、各派でさまざまな解釈が生まれる余地が生じる。
- ・ **神の前の男女平等（クルアーン） → イスラミック・フェミニズムの根拠（インドネシアの項で詳述）**

★ 多様なイスラーム／様々な分派

- ・ 大きくはスンニ派／シーア派。
さまざまな分派／ハナフィー派、シャーフイー派、マーリキー派、ハンバリー派、ワッハーブ派、
デオバンド派、イバート派／ さらにイスラームの極端な解釈にもとづくテロ過激派の登場

一般的に、サウジアラビアなど中東諸国はイスラームの戒律を厳格に守り、それ以外の地域（インドネシアやマレーシアなどの東南アジア）はそれほど厳格ではない。

問題の本質は、“近代化”をめぐる相克

・ パシュトゥーン問題

パシュトゥーン・ワリ 民族・部族の伝統的しきたり

おもてなし／聖域の提供／正義と復讐／勇気（トゥラ）／信義／仲裁（ジルガ）／信仰／尊厳／女性の名誉（ナムス）

ベースに、南アジア一帯に残存する
女性嫌悪、ミソジニー

問題の本質は、“近代化”をめぐる相克

つぎに、下記のテーマを深掘りし実践的な課題に迫ります

- ・ パシュトゥーン問題

パシュトゥーン・ワリ 民族・部族の伝統的しきたり

- ・ 民族対立 パシュトゥーン／タジク／ハザラ／ウズベク

- ・ 宗派対立 スンニ派とシーア派

- ・ イスラム原理主義・過激主義

アル＝カーイダ、イスラム国、イスラム国ホラーサーン、等々

- ・ 外国勢力の引き入れと干渉

ターリバーンが武力をつかった強権体制で、国民の生活よりも自分たちのイデオロギーを優先させ、とくに女性の人権や権利を踏みにじっていることはすでにご承知でしょうから、ここでは、

なぜそうなるのか

アフガニスタンだけのことなのか

脱却の道、連帯の道はないのか

を考えてみたいと思います。

問題の本質は、“近代化”をめぐる相克

もう一度、5つの主要テーマを確認します。

- ・ パシュトゥーン問題

パシュトゥーン・ワリ 民族・部族の伝統的しきたり

- ・ 民族対立 パシュトゥーン／タジク／ハザラ／ウズベク

- ・ 宗派対立 スンニ派とシーア派

- ・ イスラム原理主義・過激主義

アル＝カーイダ、イスラム国、イスラム国ホラーサーン、等々

- ・ 外国勢力の引き入れと干渉

問題の本質は、“近代化”をめぐる相克

・ パシュトゥーン問題

パシュトゥーン・ワリ 民族・部族の伝統的しきたり

おもてなし（アフガン・ホスピタリティ）／聖域の提供（アル＝カーイダなど）
／正義と復讐（和解のパダル）／勇気（トゥラ）／信義／仲裁（ジルガ）
／信仰／尊厳／女性の名誉（ナムス）

それぞれの項目は、部族性、氏族性、封建制、家父長制など人類が過去に通ってきた道と基本的に変わらない。そこにイスラームの影響や南アジアに残存するミソジニー（女性嫌悪、蔑視）などが深く絡み合い、独特の風俗、因習を形成。

タジクやハザラなど他の民族も同様の習俗をもっている。

問題の本質は、“近代化”をめぐる相克

・ 民族対立 主要4民族：パシュトゥーン／タジク／ハザラ／ウズベク

- 峻厳な地形、谷をひとつ越えると同じ民族でも言葉や風俗が異なる。

パシュトゥーンの中にも部族の違い、氏族の違い、名門門閥（パシュトゥーン・ドゥッラーニ一家）の違いなど複雑

- 民族構成：正確な調査は行われていない。

一例：パシュトゥーン人：42%、タジク人：27%、ハザラ人：9%、ウズベク人9%（Wikipedia）
パシュトゥーン人：38%、タジク人：25%、ハザラ人：21%、ウズベク人6%（google）

- ほかにアイマク人（ペルシャ語を話す遊牧民）、トルクメン人、バルーチ人、ヌーリスタン人、クーチ（パシュトゥーン系遊牧民）、他のイラン系民族、パキスタン系パンジャブ人、インド系諸民族民族

- 言語はペルシャ語系のダリー語とパシュトゥ語。パシュトゥ語は近代まで忘れられており20世紀中盤になってパシュトゥーン民族運動の高揚で復活。他にウズベク語などトルコ語系の出版物もある。

- 領域内の複雑な民族構成、周辺諸国との同民族の分断など、統一に向けた動きをより困難にした

・ ターリバーンの攻撃が集中したタジク人のパンジシル、ハザラ人のバーミヤーン、ウズベク人の北部

＜参考＞アフガニスタン国家の特質と対周辺国関係（鈴木均）

https://www.ide.go.jp/library/Japanese/Publish/Reports/InterimReport/pdf/2005_04_29_01.pdf

問題の本質は、“近代化”をめぐる相克

・ 宗派対立

● イスラームの2大潮流 スンニ派とシーア派

アフガニスタンの大多数（80%~90%）がスンニ派
人口の10%~20%がシーア派（民族はハザラ族）抑圧された少数派

- ・ ターリバーン（イスラム国）はハザラを敵視。
スンニ派の極端派にはシーア派を異教徒としてジハードの対象とする派もある（ISなど）
2021年8月後とくに頻発 #hazaragenocide
モスクへの自爆テロ、大学入試模擬試験場爆破事件など

問題の本質は、“近代化”をめぐる相克

・ イスラム原理主義・過激主義

アル＝カーイダ、イスラム国、イスラム国ホラーサーン、等々

西洋的、キリスト教的近代主義に対するイスラーム的 対決

国民国家思想に対するイスラーム共同体（ウンマ）の対置

- ・ ビン・ラーディンら、サウジアラビアのワッハーブ派（過激原理主義）（スンニ派）
- ・ ターリバーンはイスラム教デオバンディ派（インドやパキスタンに拠点をおく原理主義派）
- ・ イスラム国はスンニ派のなかの原理主義的で過激な異端と見なされている

スンニ派はイスラム法学者の言説により多様な法学派（マズハブ）が形成されている

<参考> イスラーム法学のダイナミズムの根源に関する一考察（櫻井秀子）
https://www2.jiia.or.jp/pdf/research/H27_Middle_East/02_moriyama.pdf

問題の本質は、“近代化”をめぐる相克

・ 外国勢力の引き入れと干渉

- ・ 1937年、ダウドクーデタ時のキエフ軍事アカデミー帰りの青年将校団
(王制時代、ソ連との良好な関係をもっていたアフガニスタン王国は軍事面でソ連に留学させていた)
- ・ 1979年、PDPAが、ソ連の軍事支援を要請
(1948年4月革命(クーデタ)によりPDPA政権成立、タラキ→アミン→カルマル 内部の路線対立が原因)
- ・ 1979年～1992年、ムジャヒディーン勢力が、米、アラブ、パキスタンと連携
(ムジャヒディーン各派は支援先の争奪を行いお互いに対立)
- ・ 1992年～1996年、ターリバーン、パキスタン、米、アラブの支援でムジャヒディーンを駆逐
(ムジャヒディーン各派は支援先の争奪を行いお互いに対立)
- ・ 2001年～2021年、米、北部同盟系を利用し、アフガニスタンに全面介入
(ムジャヒディーン各派は支援先の争奪を行いお互いに対立)

● ソ連は社会主義近代化、アメリカは西洋的近代化を実現しようとした

※『アフガン戦争の真実 米ソ冷戦下の小国の悲劇』(金 成浩、NHKブックス、2002年) ソ連を罠にかけたブレン人スキー (第2章)

問題を複雑にし、解決を困難にする 2大要因

・ デュアランドライン

これについては前回取り上げたので、簡単に復習

3000万人～4000万人いると思われるパシュトゥーン民族がアフガニスタンとパキスタンに分かたれている。（分断の悲劇であるとともに分断の現実をしたたかに利用している側も）

※ 分断の悲劇： <https://webafghan.jp/durand-line-and-fence/>

・ 南アジアに残存するミソジニー

家父長制およびイスラームの教義と絡み合い融合したこの問題が実は深刻つぎにこれを見ていきます。

◆ もうひとつの根本問題はミソジニー

◆ ミソジニーとは：現在もインド亜大陸にひろく残存する女性蔑視の思想

- ・ミソジニーとは、人類史的家父長制をベースとする女性嫌悪や女性差別的な態度・行動・信念であって、ヨーロッパでも古代・中世時代にもあった傾向。
- ・ミソジニーは、社会的な構造や文化に根差した性差別の一形態であり、女性に対する不当な偏見や軽蔑を示すもの
- ・歴史的、地域的に解消されつつあるが、近代化が遅れた地域にひろく残存。とくにインド亜大陸ダウリー(結納制)／サティ(殉死)／児童婚／ガオゴル(月経隔離)／家事労働／社会生活・日常生活上の差別（インド：女性が内に取り込むミソジニーの解消が課題）

<https://note.com/ezmom/n/ndf644872c051>

◆ ミソジニーとは：ミソジニーの人類史的根源

- ・人類史的には農業生産開始による分業の変化、富の集積による家父長制や階級の発生、統治技術としての宗教の発生。宗教の創造主は「オトコ」
- ・女は男のあばら骨から作られ、男に奉仕するもの（旧約聖書およびクルアーン）
歴史的にこの認識は科学的に否定され、宗教界でも是正されつつある
女性司祭、神父、牧師などの可能性が模索実践されつつある。女性ウラマーも誕生。
女性の力が人類の家父長制や宗教を口実とした女性差別・ミソジニーを改革・解消
インドネシアでは、女性ウラマーたちの活動が活発（後述）

◆ 南アジアにおけるミソジニーの一般的特徴

南アジアのミソジニーの現状は、国によって異なるが、一般的な実例は；

- 1) ジェンダー不平等**：南アジアの多くの国々では、男女間での賃金格差、教育へのアクセス差、政治的リーダーシップの不均衡など、さまざまな形でジェンダー不平等が存在。女性が男性よりも低い地位に置かれることが多く、経済的・社会的な機会に制約を受けることがある。
- 2) 家庭内暴力**：南アジア地域では、家庭内での身体的・精神的な暴力が女性に対して加えられている。女性が家庭内で虐待を受けたり、家庭の決定権を持つことが難しい場合がある。
- 3) 女性の教育と雇用**：いくつかの南アジアの地域では、女性の教育や雇用に対するアクセスが限られている。特に農村部や貧困層では、女性の教育機会が制約を受けることがある。
- 4) カースト制度や民族的因習と結びついた差別**：インドなど一部の南アジアの国々では、カースト制度が依然として影響を持ち、女性に対する差別と結びついている。カースト制度によって女性が複数の形で差別を受けることがある。アフガニスタンではパシュトゥーンワリ。
- 5) 人身売買と性的暴力**：人身売買や性的暴力が南アジアの一部地域で依然として深刻な問題となっている。特に女性や女子が人身売買の被害者となり、性的搾取の対象となるケースがある。

ただし、近年ではジェンダー平等と女性の権利に対する意識が高まっており、政府やNGO、国際組織などが取り組んでおり、女性のリーダーシップや教育への投資、法的保護の強化などが行われ、少しずつでも変化が進展している地域もある。その不均衡が著しいのがアジアにおけるイスラーム圏。

ターリバーンだけの問題ではなく、程度の差はあっても、歴史的には1万年以上からの人類共通の問題

事件として報道される女性差別抑圧、ミソジニーのホンの一例

・アフガニスタンでのターリバーンの政策

女性と女子の教育否定／女子の特定職種以外の就労禁止／親族男子の付き添いなしの外出禁止／美容禁止／姦通石打刑、むち打ち刑／歌舞音曲（結婚式や各種式典含む）禁止／神を称える芸術以外の芸術禁止

（ターリバーンは女性差別・弾圧ではなく、イスラームの規定にもとづく「女性保護」と主張だがそれは、クルアーンをゆがめ、イスラームをゆがめる解釈にすぎない。）

・ヒジャブ問題 イラン

マーサ・アミニ事件

2022年9月13日、ヘジャブの着け方を理由に道德警察（風紀警察）に拘束されたイラン国籍のクルド人女性マフサ・アミニさんが拘束中に死亡した事件。イラン全土で激しい抗議行動が発生

「イランで女性のスカーフ着用取り締まり強化へ ヒジャブ規制、企業を標的に」

（日経新聞 2023年8月20日）

・衝撃的なインドからのVideo 集団暴行や路上での虐待、殺害など多数

表に現れる見えるミソジニーだけでなくグレート・インディアン・キッチンほか多くの映画作品でも取り上げられている「見えざるミソジニー」「女性を内から縛るミソジニー」

◆ 現象の背後にあるもの＝アフガニスタン／パキスタン

- ・ **イスラームの曲解と部族の家父長制の固陋偏狭な因習とが結びついたもの。**
パシュトゥーンフリといわれるパシュトゥーン族の掟
- ・ パシュトゥーン族については
 - ☆ 『シルクロードの謎の民－パターン民族誌－』 (J・スペイン)
 - ☆ 『西南アジアの砂漠文化』 (松井健)(観察者の目として貴重な情報を与えてくれる。課題はそれをいかにして克服するか)
－西洋的啓蒙思想による世俗化か、クルアーンをベースにしたイスラミック・フェミニズムか
- ・ アフガニスタンではターリバーンが「不法」占拠。2020年2月ドーハ合意違反による暴力支配
ターリバーン以外の政党を認めない強権・神権支配。
国家システムは「イスラーム首長国」、支配原理はシャリーアというが中身は曖昧
カンダハールを拠点とするムッラーらの神権政治 (シャリーアの解釈、独自のファトワ)

◆ 現象の背後にあるもの＝インド

- ・ ヒンドゥー教、カースト制度、家父長制、階級差別の併存混合
- ・ ダウリー(結納制)／サティ(殉死)／児童婚／ガオゴル(月経隔離)／家事労働／社会生活・日常生活上の差別 (女性がうちに取り込むミソジニーの解消が課題になっている)

ところが女性はそれらを甘受しているだけではありません。つぎにその実例を見ます。

◆ インドネシアにおけるイスラームと女性（独自の闘い）

- ・トルコや中央アジアでは世俗化（政教分離）が導入され実施されている。
- ・インドネシアや東南アジアでも女性に対する扱いが穏やかという現実。
- ・インドネシアでは政教分離による完全な世俗化ではなく、イスラームの規定を現代的に解釈しそれを柔軟に実践。それを憲法で保証する、というシステム。

<インドネシアの憲法>（1945年の独立時に作られ数次の改変）

国民主権を具有する共和国体、並びに唯一・最高神への帰依、公正にして教化された人間性、インドネシアの統一、及び代表者間の話し合いを通じて、インドネシア全国民に、社会正義の条件を創造する合意の政策をもって指導される民主主義に基づき制定されるインドネシア国憲法

（インドネシア憲法の特徴：「インドネシアは唯一の最高神に対する信仰に基づいている」とし、全国民が各個人の宗教または信仰に従って礼拝する権利を有することを保証すると規定）（後述） そのような実践の結果⇒

では、一昨年、イランで何百人も死亡する大暴動(マーサ・アムニ事件)が何カ月も続いたヒジャブは、インドネシアではどうなっている？ その前に、アフガニスタンの現在は・・・

ヒジャブやブルカを逆手に取ったアフガン女性



抗議するアフガン女性



2022年12月、登校禁止で大学正門前で途方に暮れるカーブルの女子学生

一方、いまのインドネシアは？

◆ インドネシアのイスラーム・ファッション



インドネシアのムスリムファッション
について 野中葉ほかの著書あり

◆ インドネシアのイスラーム・ファッション 特徴

多様な宗教と文化が共存する国 モスレムの女性たちが信仰とファッションを結びつけるスタイル

1) ヒジャブやヒジャブスタイル： イスラム教徒の女性は、ヒジャブを着用。髪や首、耳などを覆う（宗教的な規範）。地域や個人の好みに応じた多様なヒジャブ・バリエーションを開発

2) モデストファッション： 穏健なスタイルを重視。体のラインを控えめに隠し、肌の露出を最小限に抑える。長袖、長丈のトップスやドレス、ルーズなシルエットが特徴的

3) カラフルで多様なデザイン： 地域ごとに異なるデザインや素材を多様に使用。伝統的なバティック柄や他の地域特有の装飾の採用

4) ヒジャブビジネスの実現： ヒジャブやモデストファッションの需要高まりに応じてファッション産業が成長。イスラムファッションの需要に合わせた服やアクセサリーが開発、提供されている

5) ファッションイベントとコミュニティ： イスラムファッションをテーマにしたファッションショーなどのイベントを開催。ファッションコミュニティの形成。これにより、イスラムファッションは社会的な交流や文化的な交換の場としても重要な役割を果たしている。

インドネシアのイスラムファッションは、宗教と文化を尊重しつつ、個々の表現やアイデンティティを大切にするスタイルとして広がっており、世界のファッション業界においても注目されている。（エルメスやユニクロ）

◆ インドネシアではいかにしてこのような状況を作り出しえたか

- ・インドネシアではイスラームと政治・社会システムを切り離す世俗化（政教分離）ではなく、宗教と政治の共存を実現しようとしている。
国民の約7割はモスLEMだがその他の宗教を尊重
- ・建国五原則＝国是としてのパンチャシラ（スカルノ時代より、唯一神への信仰、人道主義、国の統一、民主主義、社会正義）。 憲法による保証。

◆ 第2次世界大戦後の独立運動、国民的な運動、歴史の成果

- ・女性解放運動の先駆者：**カルティニの存在**（1879年生まれ、25歳で死亡）
彼女の誕生日4月21日は国民の祝日として祝われているほど。
- ・1970年代の高度成長期にイスラミック・フェミニズム運動が盛んとなる
- ・1998年暴動・政変によりスハルト政権崩壊、民主化が推進された

このような歴史的な変化と努力の一例が＜インドネシア女性ウラマー会議＞

次にそれを見てみましょう。

◆ インドネシア女性ウラマー会議

- ・ 西洋的世俗主義と異なるイスラミック・フェミニズムを標榜
- ・ **イスラームを逆手に取ったヒジャブなどのファッション化などに象徴される**

✿ 2017年4月、インドネシア西ジャワ州のチルボンで、初の**女性イスラーム法学者たちによる会議「女性ウラマー会議」**が開催された。**女性のウラマー（ulama、イスラーム法学者）の認知度を高め、イスラームの聖典であるクルアーンとハディースの理解を女性たちで共有し、ジェンダー平等を実現することが会議の目的**

✿ 5年前のインドネシア・ウラマー会議（男）は、**女性をウラマーと認めることを拒否していた**。それに反対する女性たちが実行委員会を立ち上げ、SNSで議論を深め、5年かけて実現させた会議

✿ 会議には**ナイジェリア、ケニア、パキスタン、サウジアラビア**などからも女性ウラマーや研究者が招待された。

✿ **会議終了も200以上の団体がSNSを通じて今後の活動について話し合っている**という。会議のディレクターは「この会合が、単なる一時的な活動で終わらないよう、権利擁護の確立のために力を尽くしていきたい」と話した。

インドネシア女性ウラマー会議は2017年の上記会議につづき2022年11月24～26日に第2回会議を開催。現在も政府との共同で活発な活動が続けている。

公式サイト： <https://kupi.or.id/>

インドネシアでは国際連携、経済発展にもとづき

女性解放と社会改革が前進

イラームのもとでも改革が可能であるとの実証

イスラムは怖いという偏見の除去

実践するのはあくまでも当事者

外部は支援・声援、彼らの闘いにまなび

自分たちの戦いに生かす姿勢が大事

宗教と 社会が 女性をいかに扱うか、は人間社会の基本

あらゆる人間的創造活動である思想・芸術による国際連帯が必須

日本においてわれわれに出来ることは少ないが・・・

身の回りに外国人いまや322万3858人

出入国在留管理局
2023年6月末

外国人材の受入れ及び共生社会実現に向けた取り組み

<https://www.moj.go.jp/isa/content/001335263.pdf>

(参考資料: https://www.jica.go.jp/Resource/jica-ri/ja/news/event/tfpeil0000002f5m-att/20220203_01.pdf)

- ・急速な増加（コロナで一時的に減少したが）いまや全人口の2.7%
- ・労働者として204万8675人（日本の就労人口6902万人(2022年)の約3%）
- ・労働力人口の減少を補うため「専門的・技術分野の外国人労働者の積極受け入れ」
- ・そのため、在留資格の緩和（特定技能などの導入）、さまざまな支援の実施
- ・2030年には約419万人（2020年比で143%増）、2040年には約674万人（同291%増）を受け入れる予定（これは目標GDP到達に必要な外国人労働者を確保するため）（JICA他）

一方で難民認定は少ない

- ・特例としてのアフガニスタンとウクライナ（アフガニスタンは累計500人超、ウクライナの場合は1600人超で、特別待遇）

※<https://webafghan.jp/topics/#20240401a>

アフガン人の場合は？

2023年6月末時点で日本に長期滞在している民間のアフガニスタン人は5,618人（以下入管局調べ）

■ 在留資格別

- ・ 家族滞在：2,572人／技術・人文知識・国際業務の1,299人
／特定活動426人／経営・管理391人／定住者326人／永住者268人
／留学200人

うち千葉県に2327人。特に四街道市や佐倉市が多い

そこで始めたのが 日本に住むアフガン人女性
と子供たちの日本語学校

イーグルアフガン明德カレッジ (EAMC)



- ・ 在日アフガン女性のための無料日本語・生活支援教室
- ・ アフガン女性が日本語を学び、同時に子どもたちの教育もサポート
- ・ 在日アフガン人の主婦たちにとって貴重な機会であり、感動的な瞬間
- ・ サポーターもスタッフも完全ボランティア

※詳細は <https://webafghan.jp/eamc/>



やれることはいっぱいある

共生の強制でなく融合へ

新しい文化・文明の創造

ご清聴ありがとうございました

野口壽一

NPO法人 イーグル・アフガン復興協会理事 (<https://eagle-afghan.jimdofree.com/>)
『ウェブ・アフガン』編集発行人 (<https://webafghan.jp/>)